

如来蔵思想の成立背景について

神谷正義

一

如来蔵思想とは全ての衆生の内に成仏の可能性のあることを信じ、それを如来蔵 *tathagata-garha* の語をもつて表わすものであり、一切の衆生が等しく仏陀たりうることの根拠を、*gotra-dharm-garha-prakriti* などの譬喩的、理論的諸概念を用いて闡明にせんとする宗教哲学である。

こうした如来蔵思想は原始經典にみられる心明淨説や、部派における分別論者などの心性本淨説が、その先駆的思想として一般に承認せられているところである。この心性本淨説の主張者については『異部宗輪論』に「説出世部」「鷄胤部」「一説部」「大衆部」をあげ、『婆沙論』『順正理論』では分別論者、一心相統論者を、その主張者として紹介し論難している。また、『舍利弗阿毘曇論』仮心品では先の原始經典の文を引用して心性本淨説を立てている。

しかし、これら心性本淨説を主張する『舍利弗阿毘曇論』、分別論者等の所屬部派については未だ学説を統一する程の有力な説はみられない。このような状況にあつて芳村博士は『宝性論』との関連より如来蔵思想の育成に多大な役割を果たした教団的背景への論文を提出した。如来蔵思想とそれを載つて来た教団史的、或いは文化史

的背景への研究は如来蔵思想研究の意義ある部門であるといえる。

二

インドにおける一大帝国の建設者であるアシヨカ王の十四章法勅には如来蔵思想の中心眼目でもある自性清淨心について触れており、彼は出家者に対し「*sayannam ca bhāvasudhim ca*」をねがうことが必要であるとし、又一般社会に対し「*Vipule pi ca dāne yasa nāhi sayame bhāvasudhi kīṇānā dīghatitā ca nice bhūḥam*」と述べ、宗教的実践の基盤を自性清淨心においている。一切の衆生を成仏する可能態としての存在とし、その根拠を自性清淨心に求める如来蔵思想と、アシヨカ王法勅における自性清淨心が同様のものであるとするならば、如来蔵思想の先駆をアシヨカ王という歴史的事実にまでさかのぼらしてみることができよう。

そして春日井真也博士が「アウリヤ王朝治下における仏教の変容」の中で問題提起していることを如来蔵思想において考える時、いかなる背景を満たして成立したのであろうか。如来蔵思想の成立を、その經典の出現をもつて成立とするならば、經典の作者、成立地への考察が必然の課題となる。一般に如来蔵思想の最初期の經典とされる『如来蔵經』は訳經史等の立場よりして三世紀初頭が穩当である。この『如来蔵經』をはじめとする如来蔵系經典は数多く、それら經典中に語られる地名、部派教団との関係・訳出僧の経歴などあらゆる事柄を総合的に考えなくてはならない。

香川孝雄教授は「如来蔵經典の成立について」の中で、經典中に見出される地名よりその系統を二地域に分類している。第一にヤムナー河上流のラホール付近・第二にナルバダ河沿岸地方の二地方を

有力な地域として仮定している。タラナート・インド仏教史には南方毘土耶奈迦羅地方で『如来藏経』の偈頌を童女に歌わしめたと、また、『央掘摩羅経』では頻陀山国 Vindya の名をあげ、『涅槃経』では優禪尼国・南方首波羅国 Svata を出し、この地はバルカチャの南方である。傍系の如来藏經典中にみられる「南方云々」の語は一体どの地方を示すのであろうか。そして『如来藏経』『無上依経』にみられる塔崇拜、化地部・法藏部の仏塔功德に関する教義も注意されるべきであらう。

如来藏の譬喩に見る不浄処真金・弊物中真金像・模中真金像・金山被翳・石中金などこれら金を譬喩に用いている。このことは当時の産業、社会背景を物語っているものであり、金の産出地と深い関係をもつていたと考えられる。アシヨカ王当時、既に中インド南方にあつては多量の金を産出していたことが知られる。そして『大薩遮尼乾子所説経』『泥洹経』の説示などをみる時、中インド南方も欠くべからざる地域として考えられ、当時の経済・社会状況を譬喩に用いて、より庶民に理解できるものとし、金の産出に伴う交通経済の発達と西・西北インドとの文化交流より次第に北上し『宝性論』為何義説品にみられる思想的役割を果たしたのである。

(三)

大衆部系諸部派・分別論者などによる心性本淨説を受けながらも有部の批判を乗り越え、有部と密接な関係を持ちながらも心性論、煩惱論の両面において対立する反有部思想圏に属する部派を設定し、仏性論と仏身論を共に満足させる背景を考え、般若の思想を根底に出来るべく、*uttara-tantra* として有我論に墮すことのない大

如来藏思想の成立背景について(神谷)

乘仏教の中心思想へと発展しなければならぬ。

- 1 A. N. I-5, Vol. 1, p. 10.
- 2 西義雄・水野弘元・木村恭賢・赤沼智善・勝又俊教・坂本幸男・中村端隆博士にみる事ができる。
- 3 大正・四九・一五・下。
- 4 大正・二七・一四〇・中下・大正・二九・六三三・中。
- 5 大正・二八・六九七・中・最近は法藏部説が有力。推尾・木村・渡辺・西・水野・赤沼諸博士にて論じられている。
- 6 印仏研・XV-11・一二四「仏教社会の思想的基盤」
- 7・8 摩滄法勅第七章・印度哲学研究、第四卷・二七七。
- 9 日仏年報・第三十一号、春日井真也「アシヨカ王における証の問題」。
- 10 仏教論叢第十五号所収。
- 11 『漢藏三訳対照如来藏経』解題。
- 12 印仏研・IV-1 所収。
- 13 平川彰「初期大乘仏教の研究」参照。南方大衆部・制多山・西山住・北山住部は反対の立場をとる。
- 14 『仏性論』『宝性論』『如来藏経』には不浄処真金、弊物中真金像・模真中金像がみられ、『無差別論』には不浄処真金・金山被翳、『遮尼乾子所説経』には模中真金像・石中金の譬喩がみえる。
- 15 春日井真也、山口博士記念論集、「阿育王詔勅文の社会背景」印仏研・II-1 坂本幸男「心性論展開の一断面」勝又俊教「仏教における心識説の研究」参照。
- 16 香川孝雄、恵谷記念論集「勝鬘経における煩惱説の成立」
- 17 山口益「般若思想史」高崎直道、印仏研Ⅷ-11「般若経と如来藏思想」印仏研Ⅱ-1「如来藏と縁起」、